



第76号
平成21年(2009)
7月15日発行
(年4回発行)

句間距離

青木秀樹

駅プラットフォームで電車を待つ時、東京では列を作って待つが、大阪ではバラバラに待っていて電車が停車するとわれ先にドアのところに半円形に集まるといわれる。集団行動では東京方式が優れているが、個人行動としては大阪方式の方が活力があるように感じられる。井原西鶴が矢数俳諧から浮世草子作者に変わっていった個人的な資質は風土的な影響かとも思われる。

日本人はいつから行列が好きになったのだろうか。テレビでは行列のできるラーメン屋の特集があったり、「行列のできる法律相談」というタイトルの番組すらある。

太平洋戦争の敗戦後、日本のあちらこちらに行列があった。少ない生活必需物資を大勢の国民が求めるための行列であり、それは生きるための止むを得ない行列であった。その

後日本経済が復興し高度成長を遂げ、ものが豊富になるにつれて、もの選択肢が格段に多くなった。「ものから心へ」というライフスタイルの変化の中で、人々はそれぞれのニーズでものを自由を選択できるようになった。

普通の人々が自ら求めて行列を作ったのは、一九七〇年の大阪万博からであろう。人気のアメリカ館やソ連館では二時間待ちが当たり前だった。上野の動物園にパンダが来た時も長い行列ができた。行列をうまくコントロールするノウハウを持ち込んだのは東京デイズニerlandだった。そこでは人々は夢をふくらませながら行列に身を置き、待っていた。

いま日本人は行列することはすばらしいイベントや、人気のあるもの、あるいは金銭的な利益のあることに自分も参加する喜びを感じているのではなからうか。

ところで、連句は長句と短句が交互に並ぶ行列のようなものではないだろうか。前句に付け、打越から転じるといふ基本ルールを守りながら、行列が長くなっていく。連句の多様な発想から生まれる多数の付句案の中から捌が一句を選び治定する。付句の考案に苦心している、その行列に参加していることに喜びを感じるのが連句人であろう。

行列には軍隊や学校行事のようなほぼ等間隔のものもあるが、パレードやフランスデモのように不揃いのものもある。前の人との間が詰まっていると息苦しくなり、離れすぎて

いると行列しているのかどうか分からなくなる。これは連句の世界で、去来が「附句は附かざれば附句にあらず。附過るは病也。」(去来抄)と記していることに通じるように思う。距離の詰まった句が三句も続けば「三句がらみ」の危険があり、そうでなくても停滞感が漂うことになる。また離れ過ぎた句は付味が怪しく、付いているのかどうかの吟味に頭を悩まされる。それは一巻の流れを阻害することになる。

蕉風連句では付け方の手法として「句付」が尊重されるが、それは前句と付句との間に適当な「句間距離」を取るように心がけることである。連句の妙味は前句と付句との間の付味にあり、思いもしなかった付筋を発見する喜びは連句にのめり込む主な要因になる。

「先師曰、一巻表より名残迄一体ならんは、見ぐるしかるべし。」(去来抄)とあるように、一巻の展開には序破急の変化を心がけるべきであり、「去嫌・句数」、「人情の自他場」を意識しながら付所を探り、句材や句柄、心情・場面の変化だけでなく、「句間距離」をコントロールしてリズムの変化をつけることが求められている。

「適当な距離」というのが連句で最も難しいところである。連句は一生修練であると言われるが、この「適当な句間距離」を身につけるための修練とも言えそうである。連句を楽しむながら修練に励みたいものである。

丈高い句

東明雅

丈高い句を殊更要求されるのは、第三ですし、「胴切れ」が問題になるのも、第三です。第三を丈高く作るといのは、連歌時代からの伝統で、俳諧でもこの教えが忠実に守られていきます。

丈高い第三を作るには、まず、杉形、大山、小山という形を覚えること、これがコツです。杉形 むら雀日和定むる声立てて

これは「むら雀声立てて」と作って、そのあとで「日和定むる」という中七を入れる方法です。

大山 秋の風鍛冶の研の通ひ来て

これはまず「鍛冶の研の通ひ来て」と作り、のちに上五文字「秋の風」を置く方法です。

この際「秋風に」とすると、平句的になつてしまいます。「秋の風」と切るところに丈高さがあらわれるのです。

小山 落第子口笛を吹く樹によりて

これは「落第子口笛を吹く」と作って、のちに下五文字「樹によりて」を置く方法です。

このように、杉形、大山、小山の三体を用いれば、丈高い第三を作ることが出来ます。

この三体のいずれを取っても、むら雀、秋の風、落第子というように、上五文字の語尾に

助詞などを用いず、他と切り離して作られています。これは第三を二句一章体に近づけ丈高くする方法であるとともに、吟声した場合にもよく聞こえるからであります。ただし、芭蕉の七部集を見ても必ずしもこの通りにはなっていないので、無理に拘泥する必要はありません。

碑や秋風の生む山の音

月見団子を腰にさげゆく

かりんの実籃胎に盛り賞づるらん

春ん月や木の間は余吾の水明り

帰りし鴨に睡る鳩鳥

蕨餅落着きの茶をすすめるて

次に第三を丈高くする方法として説かれるのが「すみのてにはを切る」ということです。これは簡単に言ってしまうと、一句の中で、余分な助詞をなるべく省くということです。たとえば、

月高し四阿に酔を醒ましめて

鯨釣りの人の傍に猫もあて

小面の視野の人はみな爽やかに

傍点の助詞は省略しても意味がよく分り、

また省略することで一句がすっきりします。

さらに胴切れの句を嫌うのも、丈高くするためです。胴切れとは上五、中七、下五という第三の句形と、その句の意味上の切り方が

一致しない、いわゆる句割れ、句跨りの現象を起すことです。例は次の通り。

ざざ虫を土産に／学生戻り来て

眞昼間の水面に／鳥の騒ぎるて

茶柱が立てば／何やら嬉しくて

「ねこみの通信」第五号より転載

第三の留め

第三の留めは、て留め、に留め、にて留め、らん留め、もなし留めなどが普通である。

これは脇句の多くが韻字留めであるから、

第三はてには留めにした方が懐紙面がよく、品位、品格あるように聞こえるためである。

但し、次のような注意が必要。

① 発句、脇の腰に「て」の字がある場合には、第三に「て留め」を用いない。

② 発句の切字に推量や疑問を示すような助詞、助動詞が用いられている場合には、

「らん留め」は用いない。

③ 発句が「かな」という動詞で留められている場合は、第三に「にて留め」は用いない。

「花のさかりかな」「月の光かな」の類は、

「花のさかりにて」「月の光にて」という意味に通い、ともに治定の詞だからである。

ACC 「実作と理論」より

第二十三回藤祭奉納
俳諧の連歌二十韻

宗匠	青木 秀樹
脇宗匠	倉本 路子
副宗匠	松本 碧
執筆	生田目常義
知司	林 鐵男
副知司	武井 雅子
同	横山 わこ
座配	松島アンス
座見	野口 明子
花司	染谷佳之
配硯	内田 遊民
同	佐々木有子
奏楽	吉田 酔山
老長	原田 千町

神牛のありて藤の香ただよへり	千町
東風やはらく東帯の禰宜	佳之子
ぶらんこを高く遠くとせがむらん	碧
百葉箱はペンキ塗りたて	鐵男
大統領就任式に人の波	アンス
手を取り合ひて凍月の道	路子
鱒酒は酔ひすぎますと恥ぢらへる	恭子
監視カメラは本棚の上	わこ
ふらり行く駿河台下古書の街	雅子
ぶつさらぼうの店主健在	有子
ナオ夏の雲フルートの音の高原に	遊民
コテージの庭泉溢れて	暁巳
君がため煮込み料理の支度する	酔山
法師蟬聞き募りゆく恋	千恵子
月明は雁の玉章かもしれず	昭
旅爽涼とフィヨルドの奥	未悠
ナウ油絵の仕揚げに小さくサイン入れ	明子
笑ひ上戸はかつて泣き虫	央子
咲きつぎていま盛りなり花大樹	秀樹
青空仰ぐ新築の春	執筆

執筆を務めて

生田目常義

ご存じのように平成二十年の芭蕉忌、二十一年の藤祭の正式俳諧にて執筆を務めた。苦行である。心を励ましてお引き受けした。しかし東先生手蹟の台本を懐かしく拝見し読み込んでいるうちにいろいろと考えた。なぜこの儀式は保持伝承されねばならないのか。公家上級武家主体の連歌に対して町人主体の俳諧連歌の新文化宣言として始まったと思われる正式俳諧。だがその俳諧も明治大正昭和の近代主義のなかでは捨て去られるもの、または一部の理解者のものとされてしまった。東先生の努力によって俳諧文化の連句は復活した。近代主義への批判と反省がその背景にあると思う。また日本の文化遺産の一つとして連句は保持伝承される価値があり、さらに現代社会へ提言すべき内容を有していると思う。例えばのこのようなコンセプトを踏まえず単に古式をなぞるだけでは古式の伝承も綻びて行く。現に水引の結び方にしても東台本、かつて桃径庵宗匠から頂いた見本、今回臥猫庵宗匠から指導を受けた方式、みな違う。しかし「柱に懸置く」ためには臥猫庵宗匠の結び方であれば恰好がつかない。単に懐紙を花結びの紐綴じにするのではないと解る。正式俳諧だけではないが、すべて連句の伝承についてはあらためてひとつづつ内容の吟味と検証が必要な時代になったというのが小生の認識である。

二十韻 「江戸仕草」 副島久美子 捌

二十韻 「墨東の宮」 倉本路子 捌

二十韻 「移る世の」 久保田庸子 捌

反橋を春の日傘や江戸仕草 久美子

名にしおふ墨東の宮藤祭 路子

移る世の藤房色を重ねけり 庸子

撫牛の目もうるむ藤の香 美奈子

禰宜の広袖かへす春風 達子

亀の声聞く昼の御池 ゆみを

山笑ふ車窓の景色飛び飛びに 遊民

オレンジを弁当箱の片隅に 了斎

幼稚園折紙遊びのどかにて 郁子

自前のお茶とゴルフバッグと 酔山

硬貨ひとつがポケットの中 碧

飴いっぱい大きなポケット 恭子

鯉織口をあめぐり昼の月 英子

月の裏見る少年の夏休 龍一

父と見る休耕田に月凍つる 鐵男

V字も深き羅の衿 奈

君の素足はとてもまぶしい 斎

輝割れの手をそつと暖め を

ラヴリンと呼べる彼のひと梨園にて 民

だんだんと恋の迷路に入りこみ 碧

愛だけの生計始める小京都 恭

百万ドルの笑みが愛しい 英

地蔵六体村の四辻 斎

沖に数多の漁りの船 郁

世界中策尽しても下がる株 山

ねずみもち垣根に覗く犬の鼻 龍

揚げられしサテュロスの像夢の果て 男

酒は独りで飲むべかりけり 奈

ソマリア沖に海賊を追ふ 碧

公的資金議案紛糾 恭

ナオ観光のまたぎは代々続く家 民

ナオ世界中絶えない火事を憂ひつつ 斎

ナオ遠くには登山の列の長長と 郁

焚火を囲む物の怪もゐて 奈

どっこいしょつと炬燵出る爺 達

秘湯わがもの涼しげな猿 同

貴方誰始めましてと認知症 民

そのかみは今業平と呼ばれたる 斎

物いはぬことを殊更目で語り を

初恋の女達者との文 奈

紅葉の宿へ盗む人妻 龍

秋を惜しみて後朝の笠 恭

夜這ひ道鳴子の音に逃げ帰り 山

もしかして魔女かも知れず月を背に 路

有明の歌人左千夫の墓に遭ひ を

月明白く射し至る垣 民

ピエロばかりを描いて秋ゆく 達

動かぬままの古き蠅螂 恭

ナウ般若経筆の運びも涼新た 英

ナウ里山はうす紫にけむりをり 路

ナウツキあらばここぞと張りて勝てる筈 男

五輪誘致のアスリート達 英

鴉の多い味噌蔵の町 龍

鈍感力の強く健康 庸

凜として居合を演ず花の庭 山

大盃に浮かべて呷る花筏 斎

訪ね来しまはらの里の花盛ん 郁

かたびら雪の早やも消えたる 英

そしてそれから麗らかに舞ふ 碧

田螺気儘に歌ふ乾坤 男

連衆 鈴木美奈子 内田遊民 吉田酔山

連衆 篠原達子 鈴木了斎 松本 碧

連衆 青島ゆみを 東 郁子 式田恭子

佐古英子

松澤龍一

林 鐵男

二十韻「藤祭」

島村曉巳 捌

二十韻「尺八の」

梅田 實 捌

二十韻「神の声」

横山わこ 捌

撫牛に修祓の風や藤祭

曉巳

尺八の藤の社にひびきけり

實

夏隣紫ゆかし神の声

わこ

琴弾鳥を探す参道

良子

唐破風の屋根眠る猫の仔

士郎

松の蕊立ち天地晴朗

央子

寄合ひて家業の団扇作るらん

佳之子

電子辞書言葉遊びののどらかに

文子

三壘打放つ風船一斉に

孝子

グルメのブラン選ぶあれこれ

昭

掃除当番じゃんけんで決め

志世子

アジカメ整理また浮ぶ笑み

常義

軽やかに月の兎の踊りあて

要子

ビヤホール新装開店月明し

美友紀

捨て猫が眠りほうけて凍る月

みなみ

のぞき見するは雪女郎かも

良

扇をひらく指にリングが

同

恋のあかしが雪礫受く

央

堕ちてやる悪魔の穴か恋の罫

同

魅入らるる妖しき美女のぬめる肌

文

姐さんのぱちんと切った爪紅き

孝

きんこんかんと教会の鐘

要

おぼれる程に石鯨の泡

世

長き旅路を思ふこの頃

義

原稿のメ切り時間迫りをり

之

信濃路の宿坊で待つ御開帳

士

古の暮らしは美しき始末して

わ

めったやたらとポテトチップス

良

病の癒えて挑むマラソン

同

昼を閉ざせる学校の門

み

ナオいろいろな橋くぐりゆく納涼舟

昭

ナオ昼休みおにぎり食べる鴨の池

紀

ナオプラボーとビール記念日ジョッキあげ

央

鉄漿蜻蛉こは吉原

同

画工の銘の入る絵屏風

文

シフォンの裾に踊る涼しさ

孝

ぼつくりの鼻緒を紅にすげ替へて

要

待合せ西郷像の辺りにて

世

もてるこつ海軍士官の良き姿勢

義

あれお兄さまご無体なこと

之

すっぱかされて帰るうそ寒

士

露したたるか魔女の閨にも

孝

契りしは権の実落つる月の下

良

名残月デリヘル嬢の真実は

文

今日の月安達原に風愴愴

央

こんなところに猿の腰掛

之

蟾螂は斧高く振り上げ

同

山里の湯の籠に栗茹で

み

ナウ瓢箪に似顔絵描いて展覧会

要

ナウ良識に期待の重き裁判員

紀

ナウ途中から鼻唄となる子守歌

孝

ビデオで偲ぶ志ん生の芸

之

悩まずに見るおだやかな夢

士

片脚で佇つ鷺の瞑想

み

花吹雪一升瓶のぐるぐると

昭

聖橋渡る車窓の花吹雪

世

老木の夢みる如く花の散る

孝

NPOで励む畑打

執筆

春帽軽く若人の列

紀

サイクリングの二人のどらか

義

連衆 本屋良子 染谷佳之 松原 昭

連衆 横井士郎 橋 文子 秋山志世子

連衆 遠藤央子 坂本孝子 生田目常義

山本要子

奥野美友紀

木之下みなみ

二十韻 「神の牛」 西田一枝 捌

二十韻 「鶯の笛」 永田吉文 捌

二十韻 「宇宙へ」 野口明子 捌

東風吹きて御幣真白き神の牛 一枝

藤の香りのただよへる苑 千町

臘月リユートに合はせ歌ふらん 泉子

しばし佇む散策の人 政志

水彫の鳳凰透けぬひとところ 町

登山帽子につけるゆるキャラ 泉

思ひ出は出会ひのときのお下げ髪 志

君の口づけとろけちまった 町

よく見ればふくべに似たるわが亭主 泉

勇みてをりぬ初獵の犬 町

ナオ舟下り天竜川に仰ぐ月 志

たがひやるなど視線交はして 町

引き算と左脳で決まる官の道 泉

軽い咳から病膏肓 町

雪夜とてすべて見せたいハイになり 泉

ジョルジュサンドは男だったの 同

ナウ故郷の友へ土産は巴里銘菓 志

子供の描く母は笑って 泉

直球をはつしと打てり花の下 町

昼酒美味し喰る姫虻 志

連衆 原田千町 青木泉水 峯田政志

藤房や一つ響ける鶯の笛 吉文

亀の五臓に渡りゆく東風 千恵子

春袴裾を短く着こなして 淳子

開港記念に誘ひ合はせる 忠史

ウ マティーニで話の弾む月の宴 香織

願ひの糸をそつと結んで 史

法師蟬失ひし恋思ひをり 淳

御息所は伊勢へ下りぬ 織

あの名菓復活したる物産展 千

もったいないは祖母の口癖 史

ナオ霜焼によく効くといふ軟膏を 織

屍衛兵黙深く立つ 淳

横顔が阿修羅似の彼愛しくて 千

細き腕の絡む短夜 織

バリの月ひっそり開く半夏生 千

赤道通過シャトル順調 史

ナウ子供らは物理学者を夢に見る 淳

昔の漫才面白かったね 同

写メールにアップで届く花盛り 史

編籠のなか仔猫丸まる 執筆

連衆 鈴木千恵子 上月淳子 根津忠史

藤祭香り宇宙へ届くらん 明子

目借時とてねむる撫牛 雅子

春苺ガラスの鉢に盛り上げて 敬子

玄関プザー二度鳴らす客 有子

ウ 開港を祝ふ広場に月涼し 秀樹

浴衣の袴をちよつとゆるめる 雅

そこはかと感ずる痛み恋かしら 樹

後出ししても負けるじゃんけん 有

空笑ひ五輪視察に慎太郎 雅

時刻表にて旅の計画 樹

ナオ鉛筆をはさめる耳の冷えびえと 有

仕事帰りに囲む猪鍋 敬

メドゥーサも愛された事あったのに 有

ハーレクインを読みふける日々 雅

月今宵草食男子侍らせて 有

古刹の庫裏に木の実降る音 雅

ナウ幼な児の胸に付けたる赤い羽根 敬

戴き物はすぐにあげたい 同

爛漫の花に叶へる夢ひとつ 明

微醺を帯びて臙なる宴 樹

連衆 武井雅子 須賀敬子 佐々木有子

平林香織

青木秀樹

「連句のふる里」と「初捌の思い出」

秋山志世子

新宿の朝日カルチャーセンターで「連句入門講座」を受講し始めたのは、平成八年四月でした。

東明雅先生・式田和子先生・秋元正江先生の懐かしい面影が浮かんできます。その後、原田千町先生・市野沢弘子先生・佛淵健悟先生へと受け継がれましたが、明雅先生はいつも最後部の椅子で見守って下さり、講師の先生の質問に懇切にお答えくださるのでした。

48階の教室の大きな窓からは、富士山が手に取るように見え、四季折々の雲を眺めて深呼吸をしたことや、新宿の長い地下道を超スピードでACCへ急いだ日のことを思い出します。授業の後は、49階か50階のレストラン街で明雅先生も式田先生も一緒にいらして本当に楽しく、七年間も通い続けた私の連句のふる里と思っております。

現在のACCでは、続々と頼もしい後継者が育っておられることを目の当たりにし、心強く嬉しい限りです。

楽しい昼食の後には、先輩のなさっている連句会にお誘い頂くことが通例になっていました。会場は毎回同じとは限りませんが、幹事の方が何か月も前から予約を取って下さるということでした。私の「初捌」は東郷神社の社務所でした。宗匠の中田あかり様が一講座くださり、手取り足とりの厳しくも優しいご指導を頂きました。明雅先生の「の」の字が

残った、を言葉を変えてご説明下さり漸く分ったこともありました。

次に新同人になっての「初捌」は、清澄庭園でした。坂本孝子先生が一座下さって、細々とご指導頂き、その後もファックスで何回も校合について教えて頂きました。孝子先生のご熱意を、いままもって忘れることなく感謝しております。

改めてACCの古いノートや、「ねこみの通信」を見ますと、忘れかけていた大切な事柄に沢山出合いました。すでに紅葉マークから枯葉マークの域に入っていますが、13年間の「ねこみの通信」を折々に読み返したいと思えます。

芭蕉最後の推敲

松原 昭

しら菊の目にたて、見る塵もなし 芭蕉
元禄七年九月二十七日、大坂の園女亭で巻かれた歌仙（『菊のちり』斯波園女編著）の立句。白菊は気をつけて見ても、一点の塵もなく清らかであると眼前の白菊にこと寄せて園女の風雅の清純をたたえた挨拶句。脇句は紅葉に水を流すあさ月 その女
他の連業は之道、一有（園女の夫）、支考、惟然、酒堂、舎羅、荷中。これが芭蕉の最後の連句作品となった。

二日後の二十九日には芭蕉は下痢を催し病床につく。容態悪化。十月五日、病床を久太郎町御堂前の閑静な貸座敷に移す。九日、病

床の芭蕉は支考に、去来（急変を聞いて七日に駆けつけた）にも話してあるのだが、この間（同年六月初旬）京都の清瀧で作った「大井川浪にちりなし夏の月」は園女亭での白菊の句と紛らわしいので「清瀧や波に散込む青松葉」に替えるように言っている。

芭蕉ほど作品を大事にした人も稀なのではないか。白菊の句が気に入った。しかし前にも似たような句があったので前の句を改めるという自作品の連句的推敲を行っている。それも死ぬ直前までである。

病中吟 旅に病で夢は枯野をかけ廻る
十月八日夜、介護者に書かせた後、支考を呼び「なをかけ廻る夢心」とも作したが、と意見を聞いている（『笈日記』支考編）。

また、十一日夕、参着し対面した其角にも「夢は枯野をかけ廻る また、枯野を廻るゆめ心ともせばやと申されしが、是さえ妄執ながら、風雅の上に死なん身の、道を切に思ふ也」（追善集「枯尾花」所収の其角「芭蕉翁終焉記」）。十二日午後四時没。

このように句案の推敲を幾たびか重ね重ねする姿はまるで詩神を見る思いである。結局芭蕉の念願は優れた作品を得るといふ一点に絞られていたからであろう。

歌仙は三十六歩也一步も跡に帰る心なし。行にしたがひ心の改まるは、ただ先へゆく心なれば也（三冊子）。俳諧の楽しみは付け付けられる行為にある。

私など連句会の席上、苦し紛れに以前と同じ句を出したり小手先だけ変えて出したりすることがあるが、自戒しなければなるまい。

お手本

染谷佳子

私をはじめて連句を巻いたのは昭和五十年の春であった。俳句は以前から加藤楸邨門下で勉強しており、師の影響で芭蕉の紀行文を読みその足跡を尋ね歩いていた頃である。

仕事を通じて親しくなった文学関係の人達と句会の他に「古典を読む会」も作り「七部集」「三冊子」と読み進んだが、とにかく俳諧の世界は広く深く、俳諧を知らずにいくら読み込んでみても理解はおろか、付け味の妙味すら分らぬ。一卷の中に伝統の和歌漢詩、謡曲芝居、さらに遊里の風俗人情等をちりばめ、それらを自家薬籠中のものとして自在に句に織り込み、興じ合っている江戸人の博識教養と才気には改めて瞠目するばかりであった。

そこで、われわれも浅学非才ながら、とりあえず歌仙を巻くことから始めよう、ということになった。古典に造詣の深い仲間同士で侃侃諤諤と賑やかにしゃべりながら巻いてみると、これが中々おもしろく出来上がり、それから少しずつ連句に深入りして行った。

そんなとき、同じ楸邨門の古い友人、小出さよみさんが連句集「花野」を上梓された。跋文解説は東明雅先生。この解説文が平明で素晴らしく、先生の「連句入門」と共に私達の最良のお手本として大切にしている。

俳句は一人で作り一人で推敲するが、連句は数人の仲間と共に作成する。練達と洒脱、斬新な感性とさまざまな個性の連衆が居てこそ、成り立つ文芸である。私達のささやかな会は少人数のため、どうしてもマンネリ感はやかな否めなかった。江戸で宗匠として成功し歌仙俳諧を確立した芭蕉ですら、常に手ごたえのある連衆を求め続けたのも同じ気持であろう。私は猫養会に入れていただき、明雅先生捌の座にも度々連なつて懇切なご指導を戴いた。また多彩な個性の方々とも一座し、連句の楽しみも味わっている。ありがたいことと感謝しつつ、これからも連句を大切に、分相応の精進を続けてゆきたいと思う。

不思議な醍醐味

野口明子

旅行が好きでよく出掛けるが、最近はお持ちちとして母と一緒に過ごすことが多くなった。芭蕉の足跡を巡ったり、星を見ながらの温泉や地元料理に舌鼓を打ち、命の洗濯をしている。そして連句という楽しみも加わったのだ。

新幹線や空港など、まとまった時間が取れると十七季を出して「おひとついかが」などと誘ってみる。そして巻き始めるとつい力が入り、「前の恋はあつさりしすぎ。今度の恋は激しく濃厚なものにしたいわね」などと話していると、前席の男性が怪訝な顔で振り返り、思わず笑ってしまう。

今、ACCで市野沢先生と坂本先生にご指導いただき、連句の楽しさや奥深さなどを実感している。歴史は勿論だが、付け句の味わいなど、感覚的要素も詳しくご説明下さる先生方のお言葉一つひとつが心に響いて、どんな連句の魅力に引き込まれて行く。一人で付け句を考えていると、どうしても世界が狭くなるが、教室で皆様の御句を拝見すると発想が豊かで楽しく、勉強になり、そして連衆の大切さを痛感している。

芭蕉は良き連衆を求めて旅を続けた。それは、連句が「座の文学」と言われるように、一座した方々により作品の流れが一変してしまふという不思議な醍醐味を持っているからであろう。音楽や美術などで数人が係る場合大抵は譜面や完成図があり、それに合わせてリーダーが指示するが、連句は違う。

もちろん捌きという指揮者はいるが、譜面は真っ白。そして皆持っている楽器が違い、好き勝手に鳴らしている。その多彩な音の中から付け句を選ぶのだが、捌き自身もどのような展開になって行くか想像がつかないのだ。転じも必要と、チェロ独奏の後にシンバルや祭囃子を入れてみても、それはそれで良い付け味になっていたりする。そして一巻が満尾してみると感動的な作品になっており、連句は本当に面白いと思う。

初心者です、どうぞよろしく

飯島幸子

連句を作っている方々がおられるということを知ったのは、元同僚である鈴木千恵子さんからでした。やがて文音をお誘いいただき、初めは鈴木さんと二人で、次の二回は別の知人と三人でしました。分かりやすくそして辛抱強く連句に親しませて下さったお陰で、次第に興味を深くし、平成十八年の十二月に芭蕉記念館の会に参加させていただきました。

練達の皆さんの中に突然入れていただいた大丈夫なのか、俳句も殆ど作ったことのない私としては大変不安でしたが、鈴木さんの「大丈夫ですよ。」という明るくやさしい言葉に勇気付けられて、一度参加してみる決意を怖々したのでした。

初参加は、刺激的な体験でした。数人ずつのグループに別れて行うとは聞いていましたが、聞くと見る(する)とは大違いでした。句をその場で作って出すということの大変さを、否応なしに感じさせられました。文音では時間はたっぷり使えたのに、連句会では待たなし。少したけ準備し学習してきたつもりのも身に付いておらず、頭の中はしばしば真っ白。初対面の方々の中で緊張もし、早く作らねばという気持ちとは裏腹に気がかり焦った結果、句が出せずに、熱くなったり寒くなったりコチコチでした。四・五時間それが続いた訳ですから、終了後はどっと疲れ

を感じました。もちろん同じテーブルの皆さんは暖かく優しいアドバイスをさりげなくしてくださり、とても嬉しかったです。

そして昨年九月までに八回ほど参加させていただき、初回よりは句を出せるようになったものの、本当に難しく、ままならなかったという苦い思いで帰途に就くことも度々です。が、自分の今までの体験やら過ごし方を通して思いがけない句が出来たときは、愉快でした。皆さんとの色々な会話も、帰りの水餃子屋さんも楽しかったです。

他の皆様方のように余裕の楽しい参加ができるように、もう少し勉強したいと思っておりますので宜敷お願いします。

猫養会のホームページ

島村暁巳
横井士郎

当会の新ホームページがスタートしてから約二年がたちました。

改めてご利用のご案内をいたします。まずホームページをご覧いただく際の操作の御案内です。

一 アドレスURLは

<http://nekominno.cool.ne.jp/>です。

二 インターネットを起動したら、アドレスバーに右記アドレスを打ち込めばスタートです。

三 Google、Yahoo!、gooなどのポータルサ

イトでは「猫養会」で検索すると上位に出て来ます。但し、「猫養会について」や

「猫養会ホームページ開設にあたって」というサイト内のページも検索結果に出て来ることがあります。それらをクリックするとそこから他のページに行くことができます。その場合はページの末尾にある「入口へ戻る」ボタンをクリックして下さい。一旦「入口」ページに戻ってから出直せばすべてのページへ行くことが出来ます。「お気に入り」にはこの「入口」ページを登録しておいて下さい。

四 閲覧方法などのお問い合わせは担当の横井士郎宛てにお願いします。

五 このホームページには「会員のページ」という項目があり、「季刊連句」「猫養通信」の全号と「声文翁俳諧聞書」「声文翁三十三回忌記念誌」「明雅先生追悼誌」「安曇野は昏れて紫」が入っていて随時ご覧になれます。

パスワードは「meiga」です。また当会の連句実作グループの紹介もして、現在五つの会が掲載されています。未掲載でご希望の向きはどうぞお申し出ください。

六 このホームページにはその他面白い記事が満載です。是非ご覧下さい。パソコンは…という方もご家族の方のパソコンで一度覗いて見て下さい。昔のご自身の寄稿に出会えるかもしれませんよ!

『おくのほそ道』にまつわる話

山本陽史

山形県山寺にある山寺芭蕉記念館は、芭蕉の真跡をいくつも所蔵していることで知られている。ところで芭蕉が「おくのほそ道」の旅で山寺立石寺を訪れたのは元禄二（一六八九）年五月二十七日、現在の暦では七月十三日であった。有名な

閑さや岩にしみ入る蟬の声

は、この山寺の印象をみごとにとらえた句として知られている。ところが芭蕉記念館には残念ながらこの句をしたためた真跡は収められていない。そうとう探したのだが結局見つからず、開館二十年たった現在まで出現していない。それもそのはず、実はこの句の真跡は知られている限りでは先年出現した芭蕉自筆の「おくのほそ道」のみなのである。

このように真跡が一つしかない理由は、芭蕉が「おくのほそ道」をいよいよ脱稿する段階でようやく句形が定まったからであろう。芭蕉が同行した門人の曾良は丹念に芭蕉の詠んだ句を記録している。いわゆる「俳諧書留」であるが、そこには

山寺や石にしみつく蟬の声

という句が見える。すなわち芭蕉が現地で詠んだのはこの句だった。だが、どうやら芭蕉は山寺の印象を表現した句としてはどうもしつくり来なかつたらしい。後日

さびしさや岩にしみこむ蟬の声

と改められた。初案に比べて再案の方が句としての深みがあることは明らかだ。さらに芭蕉は推敲した結果、「おくのほそ道」の最終案は格段に深みがでてきていることは一目瞭然、この句のお陰をもって山寺は今日大観光地となり芭蕉記念館も造られたわけである。

ところで、この句の蟬の種類をめぐる論争が昭和の初めにあった。山形の上山出身の歌人・斎藤茂吉がこの蟬をアブラゼミであると主張したのに対し、夏目漱石の門人・小宮豊隆はニイニゼミであると論じた。この論争は実際に芭蕉が訪れた時期に何蟬が鳴いているかという調査によって、ニイニゼミに軍配が上がったのである。

さらに、この蟬は単数か複数かという議論もある。筆者も一九九〇年前後の七月十三日前後に何回か現地を訪れ、果たして何蟬が鳴いているのか実地検分したことがあるが、蟬の鳴き声はまるで聞こえなかつた。気候にも左右されるが、芭蕉が訪れた時にたとえ鳴いていたとしても一匹か二、三匹といったところであつただろう。

しかしながら蟬の種類や数がどうであつてもこの句の解釈に影響があるわけではないだろう。俳諧の流れを汲む連句を嗜まれる方々には周知のことであるが、芭蕉に限らず当時の俳諧は実体験を詠み込むことをそれほど重視しなかつた。「客観写生」は近代になって

確立した新しい価値観なのである。

この句の手柄は山寺立石寺の本質を「閑さ」ととらえたことにあり、その閑さをいっそう際立たせる素材として蟬の音が配置されていると見るべきなのである。本来喧噪である蟬の鳴き声が静寂の中に吸収されていくさまを「岩にしみ入る」と表現したわけである。

ただし見方を変えれば蟬が単数か複数かを考えることは面白い問題をはらんでいる。俳句は日本文学を代表する形式と国際的に見なされていて、とりわけ芭蕉の句は盛んに外国語に訳されている。とりわけ英語は単数と複数の区別があるから、蟬をどう訳すかは翻訳者にとってかなり頭の痛い問題である。この句の蟬は「cicadas」と、複数形で訳されるのが普通である。これは日本人にとってはやや違和感があるだろう。俳句の場合日本人は単数を好む傾向がある。芭蕉の句として最も多く外国語に訳されている

古池や蛙飛び込む水の音

は、単数形に訳されるのが優勢だという。日本人にとつてもその方がどうもびつたり来る。しかし小泉八雲は次のように複数に訳している。

Old pond — frogs jumping in — sound of water.

芭蕉当人がどういふつもりだったのかは結局わからないのであるが、少し回り道してこの句の成立事情を考えてみよう。この句は貞

享三（一六八六）年春、深川の芭蕉庵に門人たちが集まって開いた「蛙」を題にした句合（くあわせ）。発句左右から一句ずつ出して優秀を競う句会）で詠まれた。この句に並み居る門人たちはおそろく驚倒したことであろう。芭蕉にはある企みがあったのだ。実は「蛙」を「飛び込む」と詠むことは、和歌、連歌、俳諧と続く日本の短詩系文学の伝統の中で革命的な事件であったのである。『古今和歌集』の「仮名序」に「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声をきけば、生きとし生けるものいづれか歌を詠まざりける」とあることから、「蛙」は「鳴く」と詠むという型が確立し、固定観念となっていた。芭蕉はこの定型をみごとに打ち破ったのである。

この句合の記録は「蛙合」として出版され、蕉門の存在感を大いに高からしめた。このことから、どうやら現実の情景を見て詠んだ句ではないだろうと言える。となるとこの句の蛙が何匹であったかはほとんど問題にならなかったのではないかと思われるのである。単数複数について別の芭蕉句を挙げてみよう。

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

延宝八年（一六八〇）年秋の吟である。中七は後に「とまりけり」と改められている。

この句を詠んだ直後に描かれた芭蕉の自画像がある。「寒鴉枯木図」と言われる画題であるが、この絵にはなんと二十七羽ものカラスが

描かれている。この句を詠んだ時には複数のカラスを念頭に置いていたことは明らかだ。

しかし後に書かれた自画像ではカラスは一羽のみとなっている。秋の暮の情景にはやはり一羽が似合うと考えを変えたのであろう。芭蕉が貞享年間に到達した「わび」の美意識とは、端的に言えば物が乏しいなかに美や自得を見いだすということであり、それに沿って次第に単数の方に傾斜していったのであろう。話を転じる。正岡子規は旧派の俳人たちが人格化し尊崇して止まない芭蕉を激烈に批判した。偶像破壊という過激な行動によって俳諧から俳句への革新を成し遂げたわけであるが、一方では芭蕉の俳諧の面目を一新した業績を高く評価していた。

明治二十四年芭蕉忌に際して子規が詠んだ「頭巾きて老とよばれん初しぐれ」は、芭蕉の紀行文「笈の小文」の「旅人と我名呼ばれん初しぐれ」をもじったものであろう。また、翌二十五年の「松山会」と前書のある「行年を故郷人と酌みかはす」は「行く春を近江の人と惜しみける」のもじりだろう。この年子規は俳句革新に本格的に取りかかるが、一面ではこのように芭蕉の影響を隠さなかったのである。

明治二十六年、子規は鉄道を利用して「おくのはそ道」の芭蕉の足跡を訪ねる旅に出る。その紀行文は新聞「日本」に連載された。「まことや鉄道の線は地皮を縫ひ電信の網は室中

に張るの今日椎の葉草の枕は空しく旅路の枕詞に残りて和歌の嘘とはなりけらし。されば行く者悲まず送る者歎かず。旅人は羨まれて留まる者は自ら怨む。奥羽北越の遠きは昔の書にいひふるして今は近きたとへにや取らん（子規「はて知らずの記」）とあるように「おくのはそ道」と対照的な安楽な旅であることを強調する。

この旅中「我はまた山を出羽の初真桑」という句を詠んでいるが、芭蕉が出羽庄内で詠んだ「珍らしや山を出羽の初茄子」「初真桑四つにや断ん輪に切らん」「おくのはそ道」には採られていない）を意識した句であることはもちろんである。あれほど伝統俳句を攻撃した子規がこのような紀行文を書いたという一事を取ってみても、芭蕉という俳人の存在の大きさ、「おくのはそ道」が日本文学史上の一大金字塔であることがわかるのである。

著者紹介

山形大学大学院教授。東京大学文学部・大学院で近世日本文学を専攻。山寺芭蕉記念館運営懇談会委員。古典文学の研究と併せ、日本文化の研究、現代小説・俳句・短歌の評論活動も行う。読売新聞山形版に「海坂藩探訪」、俳誌「雪車」に「古典と文学」を連載中。著書に「山東京伝」「江戸見立本の研究」など。最新刊に「日本語再入門」（日栄社）。

事務局便り

◇芭蕉忌正式俳諧興行

明雅先生七回忌追善連句会

(明雅先生発句による脇起二十韻)

日 平成二十一年十月二十一日(水曜日)

時 十一時より十七時(受付十時半より)

場所 江東区芭蕉記念館

江東区常盤一六三

電話 03-3631-1448

◇正式俳諧お稽古

平成二十一年九月十七日

於 江東区芭蕉記念館

◇平成二十二年初懐紙

於 ホテルフロラシオン

日 平成二十二年一月十七日(日曜日)

予定

◇住所変更

内田麻子

〒141-0022

東京都品川区東五反田二一九-1-1401

電話 03-6459-3295

中田あかり

〒153-0043

東京都目黒区東山二一三-10

上目黒フラワーマンション二〇五

電話 03-2760-2923

◇住所訂正

島田裕子

名古屋市東区砂田橋二一 C-906

◇郵便番号訂正

間瀬夫美

〒471-0062 ↓ 〒471-0066

◇電話番号訂正

黒木美代子

0561-73-8359 ↓ 8959

◇俳号変更

川口あや 綾 ↓ フミ子

◇猫養基金にご協力有難うございました。

源心庵の会様 二万円

山寺たつみ様 五千元

神楽坂連句会様 二万円

山田美代子様 五千元

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通 3376045

◇猫養会年会費納入口座

みずほ銀行 新宿新都心支店

普通 3376088

年会費(二千元)未納の方は右記口座へお

振込み下さいますようお願い致します。

◇句の訂正

前号(猫養通信第七十五号)掲載の作品に

句の訂正がありました。

P3 「歌留多かな」

ウ2 古い籐椅子 ↓ 麻の帷

P3 「汽笛一声」

ナオ5 路地の奥 ↓ 垣根越し

P4 「めでたや俳の」

ウ6 ご主人 ↓ 飼主

◇会の運営、その他についての疑問やご意見は、何時でも、理事、事務局にご遠慮なくお申し出下さい。

季刊 「猫養通信」第七十六号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二一二十一十六

編集人 猫養通信編集部